

5 「福祉」とは「しあわせ」 「ゆたかさ」と同意語

辻村 惺（社会福祉法人とんぼ福祉会理事長）



◆ 障害者運動への心意気と気骨に押されて……◆

二〇年ほど前のことだろうか、数か月間、夕方になるとほぼ毎日〇氏から電話が入りました。用件は、とんぼ福祉会（以下、とんぼ）の家族会が「夢を願いに」と運動し、確保した重度行動障害者ホームの土地の進入路が農道で、その通行同意のため、地権者の了解をとりつけることにありました。

もともとその農道は拡張された際、複雑な経過があり、地権者の了解をとりつけることは極めて困難が予測されていたのですが、〇氏はそれに岩でも打ち砕かんばかりの想いで立ち向かっていました。私が友人に頼んで、都市部で七〇〇坪の土地を坪十万円という

破格の価格でゆずってもらった経過もあり、私自身もどうしても実現させたい思いでした。

彼と行動を共にし、多くのことも学びました。障害児の教育権を勝ちとり、共同作業所をつくって障害者の権利を守り、家族の願いに応えてきた障害者運動第一世代の人たちの心意気と気骨を彼にみることでできたのです。

◆ 政治の場から障害者運動の現場に……◆

私はもともと学校の教員で、二六歳のときに茨木市で日本共産党の市会議員に当選し、五八歳まで八期の選挙を経験しました。とんぼとは、議員時代から障害者のいろんな要求実現で縁がありました。

当選当時（一九七三年）、茨木市では障害者に関わる職員は二人しかなく、障害者施策も極めて遅れていました。一九九四年にとんぼ作業所が認可された際、茨木市に重度障害者の加算制度をつくることを強く求めましたが、市は制度をつくることを頑なに拒み、結局約三〇〇〇万円の助成金を市がとんぼに出すことで決着しました。その後健康を損ね、引退させてもらったときには、とんぼの理事の籍にありました。

重度障害者ホーム、「生活支援センターあゆ」の建設に際し、〇氏より常務理事にとの依頼があり、最後の任務との想いで引き受けることにしました。六〇歳でした。二〇名定員の「生活支援センターあゆ」は立派に完成し、開設当時は見学者が絶えませんでした。一昨年には、同一敷地内に「わかあゆ」も増設しました。

とんぼにきて第一に思ったことは、各種民主運動が停滞状況にあるのに、障害者運動は自立支援法廃止の共同を広げ、違憲訴訟での「基本合意」、そして政府の「骨格提言」へと画期にあることです。いま政府の巻き返しのため、この成果に確信をもって、これからの運動の財産としてがんばろうと職員を励ましています。

もう一つは、ある学習会での、「事業高一億円以下

の法人、五億円以上の法人の経営は比較的に安定していますが、その間の法人は資金繰りも含めて不安定な状況にある」という講師の指摘でした。当時とんぼは二億円台で、五億円以上の法人になることを目標にしました。今は七億円弱になっています。友人からは、とんぼは事業を広げすぎて大丈夫かとの声も聞かれますが、障害者運動の世代交代を成功させ、事業の維持・発展に努力しなければと思っています。

◆ 人生の総まとめ、社会運動の二度関わりを◆

一昨年健康を害し、大きな手術も二度経験し、病もつきあいながら、人生のまとめの時期だと思っています。七五歳の私に何ができるかと考えたとき、とんぼ理事長としての役割もあるが、社会運動に関わりたいと最近思っていました。「治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟」茨木支部から支部長になる要請があり、引き受けることにしました。たたかしの歴史に学び、継承することの大切さを痛感しています。

これからもとんぼの理事長として、職員が明るく元気で、なかまたちのいい表情があふれる職場。政治を変え、障害者の権利が真に守られ、広がる社会のために、微力ですが努力をつづけます。